

コミュニティデザイン Journal vol. 96

2026年3月15日



研究 所
KOBE北・コミュニティデザインLab.

社会福祉法人陽気会

巻頭言—“Imagine” 再び!!—

この巻頭言の2022年3月号(vol.48)では、その直前の2月24日にロシアがウクライナに軍事進攻したことをふまえて、ジョン・レノン(John Lennon)の楽曲、“Imagine”(1971)を取り上げました。この曲は、1970年代初頭、世界はアメリカを代表とする西側諸国と当時のソビエト連邦(いまのロシア)を代表とする東側諸国との「冷戦」の真っ只中にあり、そうした構図のなかで展開されたベトナム戦争は終わりが見えない泥沼状態でした。そんな事態に対する平和への渴望を唄ったものでした。

「天国なんてない 足元には地獄なんてない 頭の上には ただ空があるだけ…」で始まるこの唄は、

Imagine all the people

Living for today...

「想像してみて すべての人たちが“今日”という日を生きている姿を…」と、いま、この瞬間を「生きていること」の大切を訴えています。

2番では、Imagine there's no countries (想像してみて 国なんてないってことを)と始まり、Nothing to kill or die for と、国家や大儀というようななにかのために「人を殺す理由も 死ぬ理由もない」と主張しています。

そして、3番では、

Imagine no possessions

I wonder if you can

No need for greed or hunger

A brotherhood of man

Imagine all the people

Sharing all the world

と、「所有(財産)」のない世界を想像してみて「すべての人たちがこの世界を分かち合っている姿を…」と祈りを込めて唄っています。

第二次世界大戦が終わって80年、ベトナム戦争が終わって50年、イラク戦争(2003年3月-2011年12月)からわずか15年。国際社会はロシアのウクライナへの蛮行を「国際法違反」の不当な侵略戦争だとして厳しく糾弾し、国際社会はロシアへの経済制裁とウクライナへの軍事支援をしていました。そうした最中、アメリカによる新年早々のベネズエラ大統領の拉致に続いて、今回(2月28日以降)のアメリカとイスラエルによるイランへの爆撃と最高指導者ハメネイの殺害とイランへの過剰なまでの空爆は、常軌を逸しています。いったいなにがこのような愚かで凄惨な行為をもたら



すのでしょうか。

人類の歴史を遡ると、それまで「農耕の開始」をその画期としてきた定説に対して、西田正規は「定住」の開始こそが大きな転換点だったとして「定住革命」という視座を主張しています(西田正規『定住革命—遊動と定住の人類史』(現代書館、1986)。人類も長い間、他の霊長類と同様に食物を求めて移動する「遊動」生活をしていました。そうした状態のなかで、約1万5000年前から1万年前にかけての時期に「定住」するようになります。西田は、農耕が始まったから定住するようになったのではなく、その逆で、ある場所に留まるようになり、そのことで周囲の獲物を獲る狩猟生活に限界が生じるようになり、定住を維持したいという動機のもとで、自生していた食物を「育てる」という農耕生活が始まったと説いているのです。日本でいえば、縄文時代に該当します。

そして、そのことで場所・土地の占有、食物の貯蔵・所有、よい場所を占拠した部族とそうでない部族の間での富の格差や支配・服従の関係が生じるようになりました。定住したことで人口が増え、その人口を養うためにさらに土地を求め、農耕を強化しというような営みのなかからやがて「国家」なるものが生まれ、領土をめぐる争い(戦争)が生じて…というようなストーリーになります。かつての部族単位での「風習」や「掟」は、国家のもとでは「法」として、人びとの生活を縛るようになります。

国際法はそうした国家間のルールを定めていたものですが、国際連合を含めて、軍事力を背景にした一連の蛮行はそれがいかに無力なのかということを明らかにしたといえます。

しかし、トランプでさえ、生命が有限であることを考えれば、「所有」や「支配」に執着することの虚しさに気づけるはずです。むしろ「シェア(share) = 共有」すること、あるいは「コモンズ(common) = 共有財産」の重要性にこそ、人類は目覚めることが大切です。

KCDラボ代表 松端克文

シリーズ 情勢分析と運営・実践の処方箋

今月のテーマ：新しい階級— アンダークラス —

◆「階級」とは

階級という用語は、組織内における職階を意味する場合もあるが、ここでいう階級は社会的な階級構造のことをいう。代表的な理論としては、ドイツの哲学者・経済学者であるカール・マルクス (Karl Marx, 1818- 1883) の、資本主義社会の運動法則や構造的な矛盾などを解明した『資本論』(第1巻 1967年、第2巻 1885年、第3巻—死後に出版—1894年) においての、資本家階級と労働者階級の区別が有名である。

さて、階級とは「同じような経済的地位を占め、このために同じような労働のあり方、同じような生活水準、同じようなライフスタイルのもとにある人々の集団のこと」をいう(橋本健二 (2025)『新しい階級社会—最新データが明かす「格差拡大の果て」』講談社現代新書 p.8)。そして「人々を格差と利害の対立をはらんだいくつかの階級へと分け隔てるような社会の構造を階級構造といい、このような社会のことを階級社会という」(橋本、pp.8-9)。こうした「階級構造は、いつの時代のどの社会にも存在している。それは目に見えないが、人々の行動を制約し、人々の生活を枠づけている。その意味で階級構造は、人々の不可視の舞台装置」であるといえる(橋本、p.9)。人は意識する/しないにかかわらず、階級構造の影響を受けている。たとえば、フランスの社会学者ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu, 1930- 2002) のいう学歴や知識、教養、振る舞いなど、社会的に価値のある文化的素養やスキルのことをいう「文化資本」も、その個人がどのような階級に属しているのかということ、個々人の責任を超えて、大きな違いがでることを示している。同様に「貧困の連鎖」も親が貧困状態であれば、子どもにそれが引き継がれることをあらわす概念で、社会階級を考えるうえで重要である。

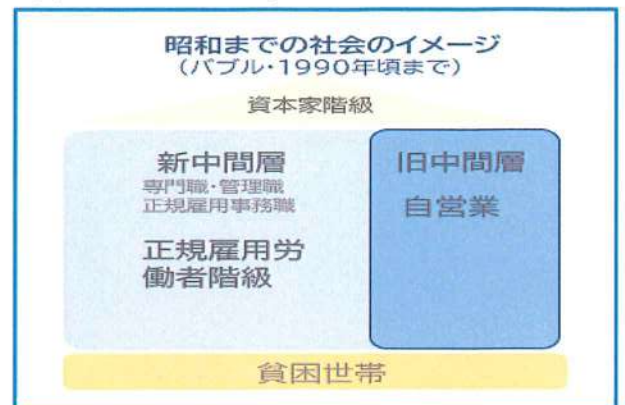
◆昭和の時代までの日本の階級構造

社会階級では、資本主義的企業の領域において、その両極に位置するのが資本家階級と労働者階級である。まず、経営者や役員からなるのが資本家階級である。ここでいう経営者には、中小零細企業の経営者も含んでいる。一方、労働者階級は、自ら働くことで賃金を得る階級である。

この2つの階級の間に「中間階級」がある。ひとつは「資本主義的企業の領域」とは別に、独立自営の農業や商工サービス業などを営む人々である。広い意味で「自営業者の領域」であり、資本主義経済体制が発達する以前から存在しているために「旧中間階級」といわれる。もうひとつが企業で働く専門職・管理職・事務職などの人々で、資本家階級と労働者階級の間位置するという意味で「新中間階級」といわれる(橋本、pp.27-28)。

こうした状況を図示すると、次のようになる。日本では、明治時代以降に近代化・産業化が急速に進むが、第二次世界大戦後の復興から高度経済成長期、1973年以降の低経済成長期を経て、バブル経済の崩壊(1990年代初頭)まで日本の社会は、世界第2位の「経済大国」といわれ、バブル期には「ジャパン アズ ナンバーワン」と年功序列・終身雇用とい

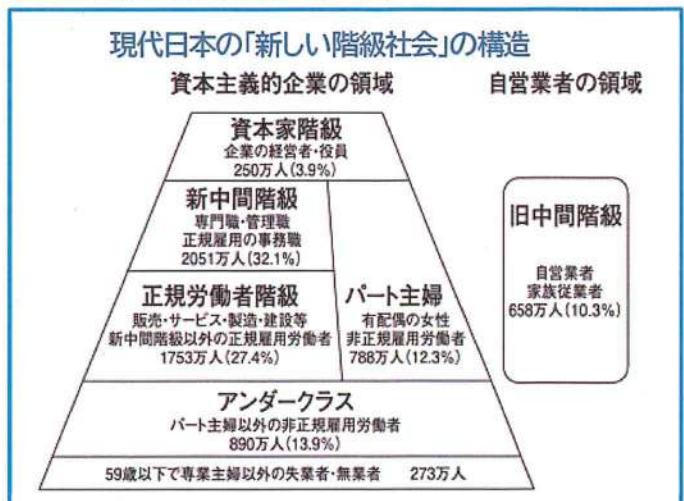
った日本の経営システムが賞賛され、「一億総中流社会」を多くの国民が共有しており、社会にはそれなりの安定とまとまりが存在していたといえる。



(資料:松端作成)

◆現代日本の「新しい階級社会」

ところがバブル経済崩壊以降(ちょうど「平成」になってから)、日本の社会の“かたち”は、大きく変容する。長引く経済不況のもとで、非正規雇用が拡大し、大規模店の出店規制が解除されたことで「シャッター街」といわれるように商店街が衰退し、地方の衰退に拍車がかかり、「格差社会」が問題とされるようになり、1990年代が「失われた10年」といわれたが、以降、改善されることなく2020年代の「失われた30年」以降、今日でも続いている。



(資料:橋本、p.28)

ここでの大きな特徴は、昭和の時代でもあった「パート主婦」以外の「非正規雇用」の増加であり、それが「新しい階級」としての「アンダークラス」を形成しているのである(橋本、p.29)。正規雇用労働者階級の男性比率は77.2%だが、アンダークラスでは女性が56.8%となっている(橋本、p.35)。また、世帯年収が全体の中央値の半分を下回る相対的貧困率は正規雇用は7.6%だが、アンダークラスでは37.2%になっている。未婚率も男性で74.5%、女性で68.4%と突出して高く(橋本、p.42)、この階層の増加が日本の社会の構造を大きく変容させているともいえる。正規雇用や旧中間層の縮小とアンダークラスの増加は、「コミュニティ」の喪失と孤立化の進展をも生み出しているのである。 KCD ラボ代表 松端 克文

(武庫川女子大学心理・社会福祉学部教授)

毎号ホットなテーマを取り上げ、ヒントを提供します。

シリーズ 障害者支援 超実践！ ⑫

～〇〇のあり方ってどうなん？～

◆来年度に向けて

今年度も残すところわずかとなりました。人事や来年度に向けた体制づくりが進み、各事業所でも少しずつ来年度の姿が見え始めている時期ではないかと思います。こうした時期だからこそ、それぞれの事業所が改めて「自分たちはどこを目指しているのか」「どこへ向かおうとしているのか」を確認するよいタイミングでもあります。

下半期の後半になると、来年度の事業計画を見据えた総合的な方針を見極める作業が増えてきます。よろこび荘全体の状態、チームの状況、そして個々の職員の育成状況などを確認しながら、サービス管理責任者やリーダーと意図的にコミュニケーションを重ね、その時点で目指せる最善を模索していく。施設長としては、毎年ここがもっとも悩ましい時期でもあります。この時期になると、私の頭のなかは常にそのことを考えている状態になります。食事をしているとき、歯を磨いているとき、お風呂に入っているとき、テレビを見ているときなど、ふとした瞬間にも考えが巡ります。当然、考え続けていると行き詰まってくることもあります。そんなとき、日常とは少し違う「良質な刺激」に触れることで、突然思考が整理される瞬間があります。1次元で見ていたものが2次元になり、2次元が3次元になり、さらにその先へと広がっていくような感覚です。ただこのように頭のなかで立体的に整理された構造は、ほかの人に説明することがとてもむずかしいものです。1次元の話だけをすれば「それがなにになるのか」と言われ、2次元や3次元の話をするれば「なんとなく言っていることはわかるが…」となり、4次元の話だけをすると「へー」で終わってしまう。かといって、すべてを説明しようとするとは難解になり、「またむずかしいことを言っている」と捉えられてしまうこともあります。もしかすると私は、チームのみんなから「なんだかむずかしいことをずっと言っている人」という印象をもたれているかもしれません(笑)。これは私自身の癖でもあり、いつも反省するところです。しかし、施設長として大切なのは、考えたことを現場が理解できる形で伝えることです。そのために、私のなかにはひとつの工程があります。まず、自分がなぜそう考えたのかを説明できる材料を整理すること。次にそれを現場レベルに落とし込み、できる限りシンプルに伝えること。そして最後に、実際の行動につながる「要諦」を見つけ出すことです。ここでいう要諦とは、単なる重要点ではなく物事の本質や核心、全体を貫く根幹の部分を目指しています。このようなプロセスを経て、よろこび荘では昨年12月に来年度の事業計画をチームと共有しました。(下記、資料一部抜粋)



このような資料を用いながら具体的なイメージを現場と共有し、対話を重ねながら会議を進めています。よろこび荘の事業計画の詳細については、また別の機会に紹介できればと思います。

今回お伝えしたかったのは、こうした内容は文章にすれば1000文字ほどで収まりますが、実際にはその背後に、日常のなかで考え続け、自分自身に矛盾なく説明し、さらに伝える相手の理解の構造まで想像するという、とても繊細で時間のかかる思考の積み重ねがあるということです。そこには当然、大きな苦悩も伴います。そして同時に、施設長としてはもうひとつの視点をもたなければなりません。苦悩して練り上げた計画だからこそ「必ずうまくいかせたい」と思うのは、人として自然な感情です。しかし組織を預かる立場としては、状況が臨界点を迎えたとき、ときにはその計画をあっさり手放し、別の展開へと舵を切る冷静さも必要になります。情熱と同時に、機械的とも言える判断を持ち合わせる。それもまた、施設長という役割(苦悩)なのだと感じています。

◆手段から目的へ — 個別支援計画を問い直す

2月26日～27日に開催された第60回近畿地区知的障害関係施設職員研修会に、第2分科会の講師として参加しました。研修テーマは『意思決定支援』を本気で考える。基調講演を含め、すべての分科会が意思決定支援にかかわる内容で構成されていました。私と遠山さんは『みんなで支える「選べる毎日」～できることから始める意思決定支援～』というテーマで講義を担当しました。運営事務局からはグループワークの実施も依頼されていたため、講義とグループワークがつながる構成を考える貴重な機会となりました。

そのなかで私は、裏テーマとして「個別支援計画を考える」という視点を盛り込みました。現場で個別支援計画の話になると、どうしても「支援方法」の話に寄りがちです。声かけを増やす、見守りを強めるなど手段の調整に終始し、本来あるはずの「目的→過程→手段」という流れが見えなくなることがあります。だから私は職員によく「日本語として成立しているか」と問いかけます。目的があり、そのための目標があり、そのためにこの支援をする、という構造が揃うだけで支援の意味は大きく変わるからです。もちろんこの考え方がいつもすんなり伝わるわけではありません。現場では人手不足や業務の多さから「理想論だ」と言われることもあります。それでも私は、まずやり切ることを大切にしています。ケース会議では「それってなんのため?」「だれが助かる?」と問い続け、行動の意味や支援の目的を考える「支援の100本ノック」を続けてきました。この2年で、数名の職員が大きく成長しました。支援を語り、最後は支援の話で終わる。そんな職員が一人でも増えることが私の願いであり、現場で問いを投げ続ける理由です。

今回は、記事を読んでくださっている他法人の方から「大谷さんの苦悩と、これからやりたいことを聞いてみたい」というリクエストをいただき、この記事を書きました。もし「大谷はこのテーマをどう考えるのか?」というものがあれば、ぜひ教えてください。皆さんのリクエストから、次の記事が生まれるかもしれません。(よろこび荘 大谷 健太)

取り組み報告 こんなこと、しています ～おかば学園より～

◆福祉型障害児入所施設おかば学園

おかば学園は、6歳から18歳までのご利用者が生活する施設です。現在は20名が在籍しており、13名の職員が家庭的な雰囲気の中で、一人ひとりの希望や特性に寄り添いながら支援を行っています。

私たち職員はご利用者だけでなく、かかわる方々を含めたすべての人々のウェルビーイングの実現を目指し、「楽しい」「安心できる」「幸せを感じられる」「ここで暮らしたい」と思える日常を積み重ねることを大切にしています。そのために、日常生活のなかで取り組む「日中活動」に力を入れています。

◆日中活動の目的

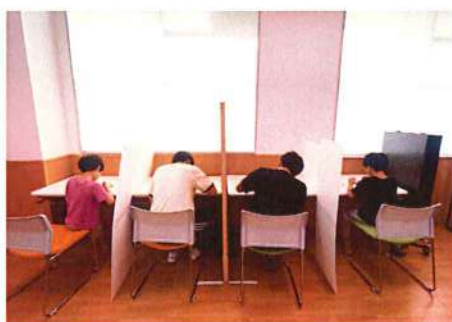
日中活動では、決まった時間・決まった場所で集中して取り組むこと、個々の特性に合わせた環境で活動することを大切にしています。また、「仕事をすることで報酬（お金）がもらえる」という流れを実体験として学ぶことや職業体験など、将来の選択肢を広げることも目的のひとつとしています。

さらに、活動のなかにはベランダ菜園での「野菜作り」や自分たちの生活空間の「掃除」などもあり、自分で育てた野菜を自分で食べる経験や、日ごろ使う場所を自分できれいにする経験を通して、主体性や責任感を育てることも目的としています。

◆具体的な取り組み

1. 構造化（空間・時間）

まず、活動の前に環境を整えることを重視しました。障害特性に合わせ、机やパーティションを活用することで集中できる空間を設定しました。“個別指導塾”に近い形を取り入れ、それぞれのご利用者が、見通しをもって活動できるよう全体のスケジュールボードも作成し、活動物品も自分で準備がしやすいように設置しました。



2. 日中活動会議

子どもたちが目標をもって活動できるように、月に一度会議の時間を設けています。スポーツ大会や園内行事に向けて、

大会に勝つためのトレーニングの内容、お祭りに向けた接客練習や計算練習、おたのしみ会で行う出し物の練習など、自分たちで相談して目標を設定し取り組めるようにしたいと考えています。

現在は、つなひきやバスケットボールの試合へ向けて、個人の目標を決めたり練習の予定を立てたりしています。



つなひき練習



“空気イス”トレーニング

3. 仕事の仕組み

「仕事をすることで報酬（お金）がもらえる」という仕組みは子どもたちにとってイメージがつきにくいので、実体験を通して理解してもらえるように、法人内の就労継続支援B型事業所（以下、就B事業所）に依頼し、受注作業を分けてもらい取り組みました。

受注作業はステップル作業という軽作業で、就B事業所と予め納期をとり決め、その期日に向けて作業を行います。完成後に納品し、就B事業所の職員から現金で工賃を受け取り、そのお金で自分の欲しいジュースなどを買いに行くという流れを通して、お金の循環を体験しました。



納品



買物

4. 職業体験

さまざまな経験を積んで学校卒業後の将来の選択肢を広げるために、就B事業所での作業体験も実施しました。長期の休みのときの月に1回ではありましたが、ネギ作業やタオルたたみ作業などに取り組みました。



5. ベランダ菜園

おかば学園のベランダでは、今夏はキュウリやナス、トマトやピーマンなど、子どもたちが興味をもった野菜の苗をホームセンターで自分で選び、購入して育ててみました。

野菜がどのようにできるのか、毎朝様子を見て水やりを行いました。大きくなることを楽しみにして、食べごろに育った野菜は、自分たちで収穫し、厨房に運んで調理してもらいました。あまり野菜が好きではない子どもたちも、“自分で育てた野菜”ということで、おいしそうに食べていました。

冬の時期には、“こうべキエーロ”というコンポストの一種を使い、土の中の微生物を活用して生ごみの分解にも取り組んでいます。



キュウリができた！



6. 掃除

日常生活を送るうえで、環境をきれいに整えることはとても大切なことだと考えています。また日ごろ使っている場所

や、物を“大事にする”ことも重要な学びにつながると考えます。

掃除の活動では、机を拭いたり、廊下、プレイルーム、お風呂、トイレの掃除に加え、公用車を洗ったり車内の掃除も行っています。



◆ご利用者・職員の変化

日中活動の取り組みを始める前は、明確な目的のない自由時間が多く、ご利用者にとっても職員にとっても、負担が大きい状態にありました。しかし、目的をはっきりとさせて活動に意味をもたせることで、

- ・報酬（お金）がもらえる
- ・他者から感謝される
- ・終わりが明確である
- ・見通しがもてる
- ・集中できる
- ・自分で決めた目標がある

という要素が加わり、時間の過ごし方が変わり、日中活動がより前向きなものへと変化していきました。

取り組みから一年が経ち、活動を通して将来自分が働くイメージをもつ子どもたちが増えてきたと感じています。また、それぞれの子どもの得意なことも見えてきたと思います。

おかば学園の職員はこれまでも、「一緒に取り組む」という意識が強い集団ではありましたが、さらにその意識は強まり、軽作業や菜園の手入れ、掃除に一緒に取り組むなかで、子どもたちの将来像について、より具体的に考えるようになったと感じています。

◆今後の目標

おかば学園は築40年以上の建物で、これまでも必要に応じてユニット化などの改築を行ってきました。しかし、さまざまな特性をもつ子どもたちの居住空間としての環境整備は、さらに必要な状況にあります。

自閉症支援においては、個室化や構造化により行動障害による課題となる行動が減少した事例もあります。もちろん環境整備だけで解決できるものばかりではありませんが、それぞれの子どもたちに配慮した生活空間の提供を目指して、環境整備に継続して取り組みたいと考えています。

子どもたちにはこれからも、日中活動の取り組みを含むおかば学園での生活を通して、社会に出る際に必要となる基礎的な事柄を体験し、いろいろ学んでもらいたいと思っています。私たち職員も一緒に取り組みながら、子どもたちの社会性を育み、「おかば学園で生活してよかった」と思ってもらえる支援を続けることを目指していきたいと思っています。

（おかば学園 浜口 綾太）

ちょっといいですか？大西ですけど…

－生まれ変わっても－

◆看取り支援

近年、この業界でも「看取り」という言葉が聞かれるようになりました。高齢者施設だけでなく、障害の施設でも、ご利用者の高齢化が進行し、施設や病院で亡くなられる方が増えてきました。陽気会は、平成29年に高齢のご利用者を支援する施設として、「ひだまり園」を開設しました。看取りができる施設として、人生の最期まで楽しくすごしていただきたいとの思いから、設備と人財を整備してきました。

私は、看取りとは、亡くなる瞬間に立ち会うということではなく、最期の最期まで幸せな生活を送ることができるよう支援し続けることだと思っています。看取りとは、「死」ではなく「生」への支援です。「看取り支援」と言い換えた方がわかりやすいかと思います。

開設以来9年、ひだまり園在籍中に亡くなられた方は、22名となっています。このうち、緊急搬送も含めて病院で亡くなられた方は15名、ひだまり園で亡くなられた方（看取り支援をさせていただいた方）は、7名です。ひだまり園の職員は、人の生と死に向き合いながら、最期までお一人おひとりの人生を支えています。これは、病院で亡くなられた方も同じです。死に向き合いながらも日々生きるための支援をする…、看取り支援の目的なのですが、大変複雑な心境だと思います。

◆利用者理解

私自身は、ひだまり園でご利用者の死と直面するたびに、この世に生まれ変わりとというものがあるのなら、この方たちは、きっと（障害とは無縁の）健常者で生まれ変わりたいと思いながら旅立っていけるのだろう、でももし、再び障害者として生を受けたとしても「最期はこのひだまり園で暮らしたい」と言っていただけるような施設でありたいと思ってきました。自分が利用者だとしたら、どんな支援や介護を受けたいだろうかとか、どんな職員を好きになるのだろうか、こんな施設で生活したいと思うだろうか…、いまでもあれこれと考えることがあります。

相手の立場に立って考えるとはよく言われる言葉ですが、現実性がありません。相手の立場にはなることはできません。相手とそっくり入れ替わることは、映画の世界の話です。本気でご利用者の気持ちを理解しようと思えば、自分自身が同じ環境に置かれる必要があります。そのためになにをすべきかを考えることが利用者理解につながっていくのだと思います。（大）

陽気会は「福祉ゾーン」としてのコミュニティの創造を目指します

陽気会は、1958年9月1日に知的障害児施設おかば学園を開所し、2025年の9月から68年目に入りました。

私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての“コミュニティ”をより暮らしていきやすくなるよう“デザイン”し、陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、皆さまと力を合わせて実践していきます。

ラボサポーター(協力会員)募集中です

施設・事業所サポーター 年間 10,000 円

個人サポーター 年間 1,000 円

サポーターの皆さま、いつもありがとうございます

陽気会のホームページ
リニューアルしました

編集委員会：松端 克文
大西 博之・朝日 満子
大島 由香利

〒651-1313
神戸市北区有野中町 2-5-19
社会福祉法人陽気会
KOE 北・コミュニティデザイン Lab.
Tel : 078(981)7271
Fax : 078(981)0825
HP : <http://youkikai.or.jp/>
Email: kcdlab@youkikai.or.jp

